

＜日本イギリス哲学会 第112回部会関東例会 報告要旨＞

第一報告： F. A. ハイエクにおける思想史研究の位置づけをめぐる

石井 元基

本報告の目的は、F. A. ハイエクにおける思想史研究が彼の思想体系にどのように位置づけられるのかを明らかにすることにある。ハイエクが自生的秩序論の淵源を探るという観点から B. マンデヴィル、また D. ヒューム、A. スミスといったスコットランド啓蒙の思想を研究してきたことは周知のとおりであるが、ハイエクによるこのような思想史研究が彼の思想体系においてどのような意義を持つのかは決して明確ではない。実際、先行研究においては、ハイエクの思想史理解の正否やマンデヴィル、ヒューム、スミス等の思想とハイエクのそれとの比較については数多く論じられてきたが、このような思想史研究とハイエクの知識論を中心とする経済学や市場を支える制度を明らかにする意味での法哲学や政治哲学とを結びつける研究はこれまであまりなされてこなかった。

しかし、ハイエクにとってはこの三者は先験的理性主義批判によって結びつくものである。ハイエクは市場を競争による社会に散在する断片的な知識の発見の場と捉えた上で、知識の発見と文明の進歩が一体であると認識していたが、当然、ここには時間的過程が存在するため、人間の理性によってその帰結を把握することは原理的に不可能である。それゆえ、ハイエクは市場に関連する知識が予め全ての経済主体に既知であるという非現実的な前提に立つ一般均衡理論を批判したのである。しかし、ハイエクによれば、一般均衡理論の非現実性にもかかわらず、市場には均衡に向かう傾向は確かに存在するという。つまり、ハイエクにとっては、理性の限界ゆえに各個人が公益に配慮することは不可能であるにもかかわらず、なぜ自生的に「秩序」が社会において形成されるのかが問題であったのである。だからこそ、ハイエクは各個人の自由な行動を公益に転じせしめる社会制度、より具体的には人々の行動を規制する抽象的かつ一般的な行為ルールやそれを人々に遵守させる存在としての政府の役割について深く考察したマンデヴィル、ヒューム、スミスへと至ることになったのである。

(早稲田大学・院)

第二報告：

快樂について

——ライルとアンスコムAnscombeの快樂概念批判から——

吉田 廉

本報告では、20世紀の哲学者ギルバート・ライルとG・E・M・アンスコムによる快樂概念の批判を取り上げ、快樂概念が孕む問題について考察する。ここでいう快樂 (pleasure) とは、マッサージを受けること、食事を楽しむこと、気心の知れた友人と会うこと、哲学の議論を交わすことといった多種多様な出来事において、われわれがよいものとして経験しているものである。ただし、このよさは道徳的なよさを必ずしも含意しない。というのも、残酷な拷問や殺人から快樂を受け取る人もいるからである。

われわれは快樂を求め、苦痛を避けようとする。避けられるべき苦痛がたいてい感覚的な苦痛であることから、イギリスの哲学者たちは快樂もまた感覚経験、あるいは内的印象の一種だと考えてきた。感覚として快樂を理解するこうした伝統にライルは反旗を翻し、アンスコムもこれにまた同調した。

彼らの批判の基盤には、古代の快樂論があった。ライルの問題提起は『ニコマコス倫理学』の快樂論に基づくものであり、彼の積極的な立場もまたアリストテレスのそれを引き継ぐものである。プラトンは『ピレボス』において快樂を感覚的に捉える立場を退け、快樂における真偽を論じている。ウィトゲンシュタインはプラトンのこの議論を念頭において「プラトンは期待を語りと呼ぶ」と述べる。快樂を志向的に捉えるウィトゲンシュタインの洞察は、アンスコムにおいては快樂概念批判と表裏の関係にある。本発表の最終的な目的は、古代的な快樂論の現代的な復活を正しく捉えることにある。

(東京大学人文社会科学研究所)